

第8章 今後の課題と展望

以上、本研究では三次元計測という新たな手法を用いて、飛鳥時代の石工技術にたいするマクロ、ミクロなデータを収集し、それを基礎資料として飛鳥時代の石工技術の実態や発達過程について検討してきた。しかしながら4年間の研究過程では、7世紀後半から8世紀初頭にかけての二上山凝灰岩の生産・流過程についてはかなり鮮明になってきたものの、依然として以下の点が課題として残された。

① 6～8世紀を通じた二上山凝灰岩の加工技術の全体像の解明

② 同時代における二上山凝灰岩以外の石材の加工技術と流過程

③ 7世紀の新技術導入に際して影響が想定される朝鮮半島の石工技術の内容や受容の実態

これら①～③の解明にはさらに多くの分析を積み重ねる必要があり、結論を得るのは決して容易ではない。しかしながら、いずれも我が国の律令国家形成期の石工技術の展開を理解する上では避けては通れない課題である。とりわけ、③の点は、技術系譜の問題だけにとどまらず、我が国と同様に律令国家形成過程において切石の生産・流通が発達する百済、新羅の状況と比較しながら研究を進めることで、我が国古代の石工技術の特質を一層明らかにできるものと考ええる。

繰り返しになるが、本研究では7世紀後半から8世紀初頭にかけての二上山凝灰岩の生産・流過程の検討が中心となったが、そもそも同時期の朝鮮半島では専ら花崗岩製品のみが生産・消費されており、石材選択において根本的な相異が存在する。このことは、それを扱う技術自体にも差異が生じていることを容易に想像させるが、我が国でも切石加工が始まった6世紀末から7世紀初頭の段階では、硬質の花崗岩類が頻繁に加工、消費されていることを踏まえると、朝鮮半島からの技術的影響は、そうした初期段階において顕著であった可能性が高い。

このように考えてくると、重要となるのは7世紀後半以降、我が国の石材加工が、凝灰岩の大量生産・消費にシフトしていくことの歴史的背景である。当該期は、我が国が律令国家としての体制を急速に整えていくとともに、政治・宗教的施設の造営が大きく進展していく段階に相当する。そうした政治的、社会的な情勢を十分に念頭におきながら、手工業生産としての石工技術の発達過程を丁寧に跡づける必要があろう。

このように、7・8世紀の石工技術の展開および石材の生産・流過程の解明を目指す本研究は、単に当該期の手工業生産の実態を掘り下げるにとどまらず、律令国家の政治的動態を追究する研究へ昇華、発展していくことが大いに期待できよう。まずは、朝鮮半島も含めて、当該期の石工技術に関する基礎データの収集に務め、研究基盤を拡大させていくことが喫緊の課題と言える。